

～日露交流史の原点・戸田でロシア水兵供養祭～

一橋大学名誉教授

中村喜和

梅雨明けの戸田訪問

今年で何回になるだろう。7月22日、梅雨明けの炎暑の候に戸田へ出かける。伊豆半島西岸のこの村では1855年、最初の日口通好条約の結ばれたその年に、500人に及ぶロシア人将校と水兵たちが滞在した。乗艦ディアナ号を、地震と津波のために一挙に失ったためである。ロシアの士官たちは辛うじて残された設計図をもとに、新しい帆船の設計図をひき、日本側代表である川路聖謨を代表とする幕府高官の肝いりで江戸からさまざまな資材提供を受け、さらに土地の船大工や職人たちを動員して、スクーナー型の二檣帆船を戸田湾の浜で建造した。



500人のロシア人も眺めた風光明媚な戸田湾

その船は、日本における最初の本格的洋式帆船の建造であった。つまり一面において、この船の建造は日本近代造船史の第一ページを画するとともに、500人以上のロシア人の人命救助を含む日口間の人道的相互関係の樹立の最初の事例となった。この事件についての文献は枚挙にいとまがないが、戸田村においては、つとに『戸田村誌叢書』として『戸田号の建造—幕末における』が刊行された(1979年)。また造船過程の関しては山本潔氏による『<ヘダ号>の建造—近代造船技術形成の初期条件』のような詳細な研究がある。(「東京大学社会科学研究所紀要」43巻5号、1992年)

戸田滞在中に死亡した水兵が2人いた。毒草を食した結果といわれる。その墓がロシア側使節の逗留した禅寺の宝泉寺に葬られていることはかねてから地元で知られてはいたが、村の港の漁師たちの夏まつりに合わせて、外部の一般市民に参加を呼びかけて供養行事を催そうというアイデアが生まれたのは21世紀に入ってからである。<村おこし>と呼んではちょっと俗っぽいPR企画にとられるかもしれないけれど、そのような動機が全くなかったとは思えない。この機に村の共同体とよそ者たちとの交流を図ろうというのは、それ自体立派な考えである、と私は考える。<村おこし>は称賛に値する事業である。

早くからそのアイデアに賛同して、私は、村の山口氏(職業は大工である)、ロシアでビジネスを展開する友人の中尾千恵子さんの驥尾に付して、毎年7月の第4土曜日あたりと日を定めた「ロシア水兵供養祭」に加わってきた。

帝政ロシアの海軍提督の正装でパレード先頭を進むプチャーチン提督

この日の主要な行事として、戸田港の棧橋に近い広場から上記の宝泉寺まで(いつのころからかそれがプチャーチン・ロードと呼ばれるようになっていた)プチャーチン提督を先頭にパレードを行ない、宝泉寺の本堂で、住職が村滞在中に死亡した水兵のための読経を行なうのである。この行列では消防団員が先導してラッパ手が勇壮な演奏を行なう。私は、まずは臨濟宗に属しながらいわば異教徒であり異宗徒であるロシア人水兵のために読経される宝泉寺のお坊さん方に敬意を表したい。

次にパレードを先導して勇壮なラッパの演奏を行なう消防団の人々にも尊敬と謝意をささげたい。さらにパレードに加わって寺に到着する人々に氷で冷やした麦茶を振る舞ってくれる村の婦人会のおばさん、お姉さんがたに深い感謝の気持ちを表明したい。炎暑の行進のあとの一杯の冷茶は汗ばんだ体を一挙に冷やし、心を蘇生させてくれる。

今年のパレードでは、プチャーチン提督の着用する海軍中將の礼服と高い羽飾りのついた帽子とともに帝政ロシア時代の正式な服装が、アナトーリイ・クラスノフ氏から寄贈された由で、提督の姿が大いに見栄えがした。提督に従う士官と水兵の制服も新調された。読経に先立つ司会者の挨拶にうながされた沼津市長の挨拶によると、ロシア側コスチューム一式はクラスノフ氏とモスクワのタチアーナ・ナウーモワさんの寄贈になる由、これには意外の感に打たれた。クラスノフさんは日本で旅行業を営む実業家、ナウーモワさんもモスクワでビジネスに従事している人物の由。制服の製作費用は数十万円に及んだと聞いた。今後は博物館で展示される。戸田の人々は二人のロシア人に大いに感謝せずばなるまい。

宝泉寺本堂での読経と死亡した水兵の墓への献花のあと、ロシア大使館の書記官によるロシア大使の祝辞の代読、プチャーチン提督役を演じるクラスノフさんの短い挨拶があった。そのあとが本日のハイライトだった。ソプラノ歌手マキ・ナオミさんによるミニ・コンサートがあったのだ。本堂の外側の幅一メートルほどの縁側が舞台。奉納された歌曲の演目は以下の通り。正教会の古い言葉による聖歌「アヴェ・マリア」。ロシア民謡「赤いサラファン」「カリンカ」。青天井の下、ナオミさんの力強い歌声は朗々とあたりの木立の中に響いた。このとき柳の木の幹から一匹の蝉が飛び立ち、本堂の大屋根の上から一羽の美しいクロアゲハが舞い降りて、聴衆の頭上を飛翔した。あたかも、故郷の土を踏むことなく、戸田の土と化した二人の水兵の霊が、聞きなれたロシアのメロディーに感応して地下から姿を現したかのようであった。

マキ・ナオミさんはカタール国ポーランド駐在の大使夫人。年季を積んだ本格的なソプラノで、東京、軽井沢などのホールでコンサートを開催している実績のある本職の歌手。



軍装贈呈者ナウーモワさんと
クラスノフさん

アカペラで詠唱する歌声がお寺の前庭で見事に響き渡るのも当然。帝政時代の提督の正装に身を固めたプチャーチンは、村の随所で大歓迎を受けた。プチャーチン・ロードのパレードの最中、左右の道端に村人たちが家族ぐるみで行列を見物していたが、プチャーチンはどんなグループにも必ず右手を挙げて敬礼し、家族単位のグループには近づいて握手を交わした。彼が常に笑顔で迎えられたことは言うまでもない。将校と水夫たちは常に敬礼しつつ、提督の後ろに控えていた。提督が自分から見物人に近づくことは今までなかったこと。162年の間において、ロシア使節と戸田の村人が再び手を握る光景に接すると、胸にこみ上げるものがある。「<容改まれば、心改まる>とはこのこと」と私の連れの相馬さんがつぶやいた。制服を新調した効果は十分にあったのである。

帰途は山口さんの車で送ってもらう。三島を過ぎたあたりで、山口さん、突如伊藤教授に電話する。伊藤氏は帆船ヘダ号復元プロジェクトの同志。

在宅とわかり、千本松原近くの伊藤氏豪邸を3人で訪問。茶菓の接待にあずかる。伊藤氏はヘダ号の設計図を方眼紙に記入している。以前、不明瞭なコピーを差し上げておいたものが方眼紙の上に明確な輪郭を現わしている。感激。

その後伊藤教授も同乗して富士市でディアナ号の二つ目の錨(最初の錨は戸田の博物館前にかざられている)を見物。さらに、同市の地の公園に建てられたディアナ号の船体のレプリカを見物する。富士市の田子の浦あたりは、下田港で地震と津波のため満身創痍の状態になったディアナ号が百隻近い日本の小舟に誘導された末、遂に座礁して使節たるプチャーチン提督はじめロシア人船員たちが次々と浜辺に降り立って、上陸を果たしたところ。疲労困憊したロシア人たちに対して、村人たちは炊き出しをしていたわったという。二三日休憩した後、彼らは東海道を目的地の戸田村目指して行進したのだった。

追記: マキさんのコンサートの後、宝泉寺から遠からぬ勝呂六実さんのお宅をおとずれる。勝呂家は松城家などと並ぶ村の草分けの一つで、代々庄屋を勤めた家柄である。同家の土蔵には古くからの文書が大量に所蔵されていて、プチャーチン使節団の滞在時にかかわるロシア語関係の文献がその中に含まれていることはかねてから知られていた。見事な門構えを備えた勝呂邸は、現在では静岡県指定の重要文化財として指定を受けている。ロシア語関係の資料の片鱗はすでに公刊されている(中尾千恵子「プチャーチン異聞」、中村・長縄他編『異郷に生きる』第6巻、成文社、2016年)が、供養祭の機会にご当主の六実さんが現住所の沼津市から一時帰宅されて、膨大な史料の一端をご紹介くださるお話をいただいていたのだ。

ニコライ・ザドールノフというソビエト時代の作家がプチャーチン使節団の来日から戸田村退去までの一部始終を『北から来た黒船』という長編小説に描いているが、その戸田編に勝呂野馬堂なる風雅な俳人が登場する。戸田の山では一時馬の飼育や繁殖を手掛けたこともあった由で、彼の俳号はその故事にちなんでいるらしい。勝呂家は医術に長じた人物も輩出し、先代か先々代のご当主が沼津市に移って病院を営んでいる由。実は勝呂文書の一部は村の博物館で展示が行なわれたそうで、門外不出で秘蔵されているわけではなかった。博物館で公開された分は写真で見ることができたが、今回眼福にあずかったものの中にも、興味津々の史料が数え切れないほどあった。好奇心を抑え切れず、ナマコ壁の土蔵の二階まで覗かせていただいたが、段ボール箱の中に麻ひもで無造作に束ねられた二束の古文書の中にどれほどの宝物が含まれているかは、垂涎して想像する以外なかった。



日口友好の歌を熱唱するマキ・ナオミさん(左)

今年の戸田村行では、往復の交通の便の点で、関西の実業家で関西日露交流史研究センター主宰でもある岩佐毅さんのお世話にあずかった。特に記して感謝の意を表したい。

当日のパレードの様子がロシアのTVで放映されました！

こちらのサイトから動画をご覧ください→ <https://youtu.be/iCCriaSjRdA>